リリイ
&
エンマ
G
グリーンボー

グリーンボー

リリイ＆エンマ

表 紙　　リリイ＆エンマ

第（だい）　1　章（しょう）

　ある日（ひ）、ママがいいました。

「ちょっとすわりにくいけど、いい椅子（いす）ねえ、言葉（ことば）がわかるんだもの。そうだ、コペルくんのにしましょう！」

「コペルくーん！！来（き）てごらーん。この椅子（いす）に腰（こし）かけてごらーん！！」

　コペルくんが、びっくりしていいました。

「ママ、これ、椅子（いす）じゃないよ、人間（にんげん）じゃないか？」

「それが、椅子（いす）なのよ」

　言（い）ってママは、椅子（いす）を、そっとたたきました。

「うそだあ！」

「ほんとよ、ママが注文(ちゅうもん)して作(つく)ってもらったんだもの。たったいま、とどいたところよ」

夜(よる)になりました。

「お父(とう)さん、椅子(いす)つくったかなあ。また、お酒(さけ)のんで、なまけているんじゃないかなあ」

椅子(いす)くんはそっと、ドアを開(あ)けて、外(そと)に出ました。

歩(ある)いていると、後(うし)ろから小(ちい)さな足音(あしおと)がしました。

月(つき)の光(ひかり)に、黄色(きいろ)のパジャマがゆれています。

「ぼくの椅子(いす)、どこにいくの？」

コペルくんが、小(ちい)さな声(こえ)でききました。

「ご用(よう)、ありますか？」

椅子(いす)くんがいいました。

「用(よう)って？　ぼく、椅子(いす)に腰(こし)かけたいんだよ。なぜ、ぼくのお部屋(へや)から逃(に)げていくの？」

　コペルくんが、大(おお)きな声(こえ)でいいました。

「しょうがないなあ！　だったら、腰(こし)かけろよ！」

　椅子(いす)くんが腰(こし)をひくくして、いいました。

「さあ、のって！　椅子(いす)でなく、車(くるま)になってあげてもいいよ。おんぶして歩(ある)きまーす！」

「おんぶは、赤(あか)ちゃんみたいで、いやだもん！」

　コペルくんが口(くち)をとがらせました。

「おんぶから、車(くるま)に、肩車(かたぐるま)になりまーす！！」

　椅子(いす)くんは立(た)ち上(あ)がると、コペルくんの二本(にほん)の手(て)と椅子(いす)くんの前足(まえあし)で、バンザイをしました。

　コペルくんの手(て)が、月(つき)にとどきそうです。

「高(たか)ーい、高(たか)ーい！！」

コペルくんが、キャッキャッと、声(こえ)をあげました。

車(くるま)が走(はし)り出(だ)しました。

「早(はや)ーい、早(はや)ーい！　ほんとの車(くるま)より早(はや)いよー！！」

コペルくんが、椅子(いす)くんの顔(かお)をのぞきこみました。

その時(とき)、椅子(いす)くんの後(うし)ろ足(あし)が何(なに)かにぶつかりました。

「あぶないじゃ、ないかあ！！」

椅子(いす)くんが、どなりました。

お酒(さけ)によって、道(みち)にねそべっているのは、椅子くんのお父(とう)さんでした。

「これじゃ、椅子(いす)なんか作(つく)らないで、自分(じぶん)がベンチになればいいんだ！　ぼくを、自分(じぶん)の子供(こども)を、椅子(いす)なんかにしてさあ。こんな、なまけものの大人(おとな)なんて、どこにも、い

ないよ！」

椅子(いす)くんが、目(め)をごしごしこすりました。

本(ほん)ものの車(くるま)が、何(なん)だいも、そばをすぎていきます。

「ひかれちゃうよ！！」

コペルくんが心配(しんぱい)しています。

「ああ！！」

椅子(いす)くんは、お父(とう)さんの頭(あたま)を、コペルくんは足(あし)をかかえて歩(ある)きだしました。

もう、重(おも)くて、重(おも)くて、死(し)にそうです。

がまんできなくなって、森(もり)のなかへ、バターンと、たおれこんでしまいました。

二人(ふたり)は、そのまま、つかれきって、眠(ねむ)りました。

朝(あさ)、葉(は)っぱと、葉(は)っぱのあいだを、くぐってきた太陽(たいよう)の光(ひかり)が、たくさんの小(ちい)さな太陽(たいよう)になって、はじけました。

若(わか)い葉(は)っぱをすかしてきた、やわらかい光(ひかり)と、光(ひかり)を通(とお)さない葉(は)のかげで、二人(ふたり)の顔(かお)が、まだらもようになりました。

「まだら、おばけ！！」

椅子(いす)くんが、コペルくんを見(み)て笑(わら)いました。

「まだら、おばけ！！」

コペルくんが、椅子(いす)くんを見(み)て笑(わら)いました。

「これも、あれも、みどり色(いろ)なの？」

コペルくんが、首(くび)をかしげています。

「いくつ、みどり色(いろ)があるか、かぞえてみようか！！」

椅子(いす)くんが、かぞえはじめました。コペルくんも、声(こえ)をあわせます。

「1．2．3．‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥29．30 ！」

コペルくんが、とくいそうです。

色々(いろいろ)な小鳥(ことり)のなき声(ごえ)がしていました。

虫(むし)が動(うご)きだしました。

「ぼく、幼稚園(ようちえん)にいくの、やーめた！！」

コペルくんがいいました。

そのとき、風(かぜ)もないのに、木(き)の枝(えだ)がゆれました。

「ぼく、グリーンボー！！」

枝(えだ)の上(うえ)から、男(おとこ)の子(こ)がいいました。

「グリーン、グリーン、グリーンボー。グリーン、グリーン
グリーンボー」

森(もり)の木(き)の葉(は)が、はやしたてます。

「みんな、ぼくの、友(とも)だちなんです」

グリーンボーがいいました。

グリーンボーが、コペルくんを、枝(えだ)の上(うえ)に、「ヒュ、ヒューン」と、引(ひ)き上(あ)げてくれました。

椅子(いす)くんは、一人(ひとり)で、よじのぼりました。

それは、クスの大木(たいぼく)でした。

「きみ、学校(がっこう)に、いかないの？」

グリーンボーが、椅子(いす)くんにききました。

「ぼく、学校(がっこう)より、働(はたら)く方(ほう)がすきさ！」

椅子(いす)くんがいいました。

「そう、なら、ぴったりの国(くに)があるさ！」

グリーンボーが笑(わら)いました。

「大人(おとな)が学校(がっこう)にいって、子供(こども)が働(はたら)くんだ。お金(かね)をもらって」

「お金を？」

椅子くんが、つぶやきました。

「うん、ほしいのかい？」

グリーンボーが、椅子くんをのぞきこんでいいました。

「あれえ、ぼく、でっかい、忘れ物しちゃった！！」

椅子くんが、大声をあげました。

「ああ、お父さん！！」

コペルくんが椅子くんと、顔を見合わせて、肩をすくめました。

「ヒョー　ヒョー　ヒョー　ヒョー」

グリーンボーが、口笛を吹いています。

ばたばた、フクローが飛んできて、グリーンボーの肩に止まりました。

「椅子くんの、お父さん、見なかった？」

　グリーンボーが、聞ました。

「午前三時頃、この子たちに、落葉をかけてあげると、森から出ていったよ」

　寝ていたのを、起されたフクローが、とじてしまいそうな目をパチパチさせています。

「やさしい、お父さんなんだね！」

　グリーンボーが、あんしんしたようにいいました。

「それほど、でも‥‥」

　椅子くんが目をごしごしこすりました。

「ああ、そうだ！　コペルくんのママには、椅子くんのお父さんが電話していたよ」

フクローが、泣きだしそうな、コペルくんの心配がわかったみたいに、うなずきました。

「さあ、これで、心配もなくなったな。コペルくんも、椅子くんも、ぼくといっしょに、飛びましょう！！」

グリーンボーがいいました。

「さあ、手をつなごう！！　風と、葉っぱを利用して、進むんだよ。そうだ！！　若い葉っぱの上は、ポ、ピュ、ペ、パ、ポ。そう！！　みどりの濃い葉は、シュー、シュー、シューハ！！」

コペルくんも、椅子くんも歌いました。

「ポ、ピュ、ペ、パ、ポ。ポ、ピュ、ペ、パ、ポ。シュー、シュー、シューハ。シュー、シュー、シューハ」

森の葉っぱが、浮きあがりました。

三人は飛んでいました！！

「グリーン、グリーン、グリーンボー。グリーン、グリーン、グリーンボー‥‥‥」

送りだしてくれた、森の葉っぱたちの歌声が大きくなりました。

空気の流れにのったようです。

山や川や、村や町が小さくなっていきます。

「風にあおられた木の葉には、大変な浮く力があるんだよ。ぼくには、それをキャッチする力があるのさ！！」

グリーンボーが、とくいそうにいいました。

「なぜ？　なぜ？　なぜ？　なぜ？　学校でならったの？」

コペルくんは何でも聞たがりやの、幼稚園の年長さんです。

「すごいなあ！！　自分で考えたの？　それとも？」

椅子くんが考えこみました。

三人は、白い雲の上で休みました。後ろからつづいてきた、森の小鳥や、ちょうも、せみも、休みました。

「ぼく、U星人！！」

グリーンボーがいいました。

「ぼく、ぼく、なに人？」

コペルくんが椅子くんにききました。

「ぼく、地球人！！」

椅子くんから聞いた、コペルくんが、胸をはりました。

「ぼく、ひま人！！」

椅子(いす)くんがいって、みんなで、笑(わら)いころげました。

小鳥(ことり)も、ちょうも、セミも、舞(ま)い上(あが)りました。

太平洋(たいへいよう)の真上(まうえ)で、白(しろ)い雲(くも)が、動(うご)かなくなりました。

「ぼく、おなか、すいた！！」

コペルくんが泣出(なきだ)しそうです。

「これから、ごちそうするよ！！」

グリーンボーが、バク転(てん)して、いいました。

雲(くも)が雨(あめ)を降(ふ)らせながら、下降(かこう)していきます。

南海(なんかい)のすきとおる海(うみ)に、泡(あわ)を上(あ)げながら、雨(あめ)が沈(し)ずんでいきました。海面(かいめん)は、すぐそこです。

「『グリーンU』に、ようこそ！！」

グリーンボーが右手をあげました。

そこは、それは、それは、大きな、大きな、葉っぱの上でした。

円盤型の巨大な緑色の葉っぱが、幾千となく広がり太陽の輝く光りをうけて、赤いラッパみたいな、巨大な花を咲かせていました。

椅子くんが、コペルくんを肩車に乗せました。

赤い花のなかは、蜜があふれだし、甘いかおりがしていました。

「なめてごらん！！」

グリーンボーがいいました。

「おいしい！！　こんなの、うまれて、はじめて！！」

おなかがすいて、泣いていたコペルくんが、笑いまし

た。

三人は、広いみどりの葉の上で、走りまわったり、転げまわったり、花によじのぼっては、蜜をなめました。

「これはね、一年前、ぼくが、U星から打ちあげた、ピンポン玉みたいな、カプセルの一つが、宇宙空間を突き進んで、地球に到着した、しるし！！」

グリーンボーが、大きな、みどりの葉っぱを、やさしく、なでながらいいました。

コペルくんが手を上げました。

「花のたねが入っていたの？」

「南の海が、こんなに、大きく育てたんだね。見てごらん！　しましまのサンゴや、でっかい、シャコ貝もいる

よ！」

椅子(いす)くんが、海(うみ)の中(なか)を、のぞきこみました。

「見(み)えるだろう！　枝型(えだがた)や、きのこ型(がた)のサンゴの間(あいだ)に、カプセルが沈(しず)んで、それから、破(やぶ)れて、白(しろ)いひげみたいな根(ね)を広(ひろ)げていったんだ！」

グリーンボーが根(ね)っこを引(ひ)き上(あ)げて見(み)せました。

「U星(ゆうせい)って、地球(ちきゅう)の兄弟星(きょうだいぼし)だって、いうの、ほんとう？」

椅子(いす)くんが、思(おも)い出(だ)したように聞(き)きました。

「そう！！　U星(ゆうせい)は、地球(ちきゅう)とは反対(はんたい)がわにあるけど、としは多分(たぶん)、四十五おくさい。地球(ちきゅう)と、同(おな)いどしで、空気(くうき)も、水(みず)もある。何(なに)よりも人間(にんげん)が、くらしているんだよ！！」

グリーンボーが、二人(ふたり)を見(み)つめました。

コペルくんが手(て)を上(あげ)ました。

「ふたごの星(ほし)なら、コペルくん、いるかな？」

「ああ、そうだなあ。　きみ、どう思(おも)う？」

グリーンボーが、椅子(いす)くんにききました。

「いても、不思議(ふしぎ)はないけど、なら、グリーンボーは地球(ちきゅう)にいたの？」

「いました！！　でも、今(いま)はヒミツ！！」

グリーンボーが、顔(かお)をそむけて、いいました。

風(かぜ)がでたのか、グリーンボーのスカーフが、虹色(にじいろ)になって、たなびいています。

みどりの葉が、くきをのばしはじめ、今まで見えなかった葉の裏に、蜜ばちの巣が、水玉もようになって、はりついていました。

「出発だよ！　ぼくのふるさと、U星へ！！」

グリーンボーが、コペルくんと椅子くんに、お揃いの帽子をかぶせてくれました。二人は虹色のスカーフを首に巻きました。

「地球の鮭が、生まれた川を忘れないで、もどって来るように。U星の草や花たちも、カプセルに乗ってきた道を、おぼえていて、　今日、U星に帰るんだよ！！」

グリーンボーが、遠くを見ような目をしました。

「ぼくたちは、しんがりだから、天体(てんたい)ショーを楽(たの)しめるかな？」

変化(へんか)は東(ひがし)がわ、からはじまりました。みどりの葉(は)や、赤(あか)い花(はな)は、つぎつぎに、くらげのように、白(しろ)いひげ根(ね)をただよわせて、上昇(じょうしょう)をはじめたんです。

竜巻(たつまき)のような、光(ひかり)の帯(おび)のなかを、無数(むすう)のくらげが泳(およ)いでいました。

蜜蜂(みつばち)や、ちょうや、せみも、飛翔(ひしょう)をはじめました。光(ひかり)の帯(おび)は弧(こ)をえがいて、宇宙空間(うちゅうくうかん)をのびていきます。

「さあ！　ぼくたちの番(ばん)だよ！！」

グリーンボーは、コペルくんと、椅子(いす)くんを引(ひ)き寄(よ)せると、自分(じぶん)の帽子(ぼうし)を伸(の)ばして、三人(さんにん)を、すっぽり包(つつ)みこ

みました。

スカーフをなびかせて、立派(りっぱ)なくらげに変身(へんしん)です。

「すごーい！！」

コペルくんが手(て)をたたき、椅子(いす)くんは目(め)をこすりました。

「さあ、足(あし)で、葉(は)っぱをけって！！　そう、グリーン、グリーン、グリーンボー、そうだ！！」

コペルくんも、椅子(いす)くんも歌(うた)いました。気球(ききゅう)の中(なか)に空気(くうき)が張(は)りつめ、尾(お)をなびかせて、光(ひかり)の帯(おび)の中(なか)を昇(のぼ)っていました。

ときどき、光(ひかり)の帯(おび)を、天体(てんたい)の黒(くろ)い影(かげ)がすぎていきます。

ヒューヒューという音(おと)がしていました。

「宇宙(うちゅう)の呼吸(こきゅう)する音(おと)だよ」

グリーンボーがいいました。

それは、これから芽吹(めぶ)くものを内(うち)に抱(いだ)いて、時を待っているような、そんな音(おと)に聞(き)こえる、と。

第　2　章

突然(とつぜん)ショックがきて、気球(ききゅう)はころころ回転(かいてん)して、止(とま)りました。

「パッチッ」と音(おと)がして、グリーンボーの帽子(ぼうし)がはねました。

光(ひかり)がしぶき、七色(なないろ)のオバケが、コペルくんの、椅子(いす)くん

の目の前で、のびたり、ちぢんだりしていました。

　オバケにはたくさんの、きらきらした目があって、

U星の子供たちがのぞいていました。

「グリーンボーだ！！」

　だれかが、叫びました。

「グリーンボーが、帰って来たぞ！！」

「グリーンボーが、たくさんの、おみやげを持って、帰ってきたんだ！！」

　子供たちは、おどりだしました。

　「グリーン、グリーン、グリーンボー。 グリーン、グリーン、グリーンボー。 グリーン、グリーン、グリーンボー」

　海に着水した、『グリーンU』のくらげたちも、元気をとりもどして、子供たちといっしょに歌っています。

「きみがいなくなって、ぼくたちの胸(むね)には、でっかい穴(あな)が開(あ)いていたんだ！！」

声(こえ)がして、マイクがグリーンボーの胸(むね)に、つきつけられていました。

「やあ！！　ぼく、グリーンボー！！　今(いま)、地球(ちきゅう)から、ふるさとU星(ゆうせい)に帰(かえ)ってきました！！　それでは、地球(ちきゅう)のお友(とも)だちを、しょうかいしましょう。　大(おお)きい方(ほう)が椅子(いす)くんで、小(ちい)さい方(ほう)がコペルくんです！！」

グリーンボーが、手(て)を振(ふ)っています。

Uポートに押(お)し寄(よ)せた、子供(こども)たちの、拍手(はくしゅ)が鳴止(なりや)みません！！

「見(み)てごらん！！　これが、こどもの国(くに)、ぼくたちの町(まち)だ

！！」

グリーンボーが、オーバーに、腕(うで)を広(ひろ)げました。

みどりを背景(はいけい)にして、明(あか)るい、色(いろ)とりどりの、丸(まる)や、三角(さんかく)や、四角(しかく)の家(いえ)が見(み)えていました。

「きれーいだなあ！！　ぼくの、積(つ)み木(き)の箱(はこ)を、ひっくりかえしたみたい！！　ああ、木(き)の上(うえ)にも、玉(たま)つなぎ！！」

「ウッフン！！」

コペルくんが、ため息(いき)をつきました。

U星(ゆうせい)の子供(こども)たちが笑(わら)いました。

「ぼく、こんな家(いえ)にすみたかったな！！　色(いろ)も、形(かたち)も、自由(じゆう)！」

「ヒュー！！」

椅子くんが口笛を吹きました。

U星の子供たちが、おどりあがりました。

「ここにいるのは、U星じまんの、学校嫌いな、子供たちです！！」

いって、グリーンボーは、とくいのバク転をしました。

「ぼくたちも、学校嫌いだもん！！　ね！！」

コペルくんが、椅子くんを見上ました。

それは、花びらが、風に舞うように、やってきました。

色とりどりの小鳥が、U星の子供たちの上に、舞降り、肩や、頭や、腕や、指先に止ったんです。

女の子が、近づいてきました。

「わたし、ももか。 この帽子(ぼうし)あげます！！ 大切(たいせつ)に

かぶっていたら、あなたの帽子(ぼうし)にも、小鳥(ことり)が巣(す)をつく

るわ」

「ぼく、小鳥(ことり)を、指(ゆび)に止(と)まらせて、みたかったの。仲良(なかよし)に

なりたくって、なりたくて、しょうがなかったんだもん！！」

コペルくんが、ため息(いき)をつきました。「フッフーン！！」

U星(ゆうせい)の子供(こども)たちが、笑(わら)いころげました。

「大丈夫(だいじょうぶ)、二(ふた)つあります！！」

ももかちゃんが、いいました。

帽子(ぼうし)がコペルくんと、椅子(いす)くんの頭(あたま)の上(うえ)で、太陽(たいよう)の

光(ひかり)をうけて輝(かがや)きました。

「大切(たいせつ)にします！！」

椅子(いす)くんが頭(あたま)を下(さ)げようとすると、ブーイングの嵐(あらし)が

きました。

「ダーメ！！」
「おじぎは、ダーメ！！」

椅子(いす)くんは、あわてて帽子(ぼうし)を両手(りょうて)でおさえました。

「この子供(こども)の国(くに)では、おじぎはなしだよ。はじめは小鳥(ことり)のためだった。でも、だんだん、そのよさがわかってきたんだ！！」

グリーンボーがいいました。

「さべつしないこと？　平等(びょうどう)？」

椅子(いす)くんが問(と)い返(かえ)しました。

グリーンボーが、うなずいています。

コペルくんが手(て)をあげました。

「そのほうが、めっちゃ、たのしい！！　そのほうが、なかよしになれた！！」

「あたりー！！」

U星の子供たちが、手をつないで飛びあがりました。

「おまたせしました。では、みんな、『グリーンU』にどうぞ！！」

グリーンボーが右手を高々とあげました。

待ちかねていたU星の子供たちが、へんな声をあげて、走りだしました。

U星の青い海に、幾千もの巨大な円盤型の葉を広げ、赤いラッパみたいな、巨大な花を咲かせ、『グリーンU』は、ゆったりと、幸福そうに浮かんでいました。

U星の子供たちは、巨大な葉の上で、撫たり、走ったり、かいだり。 それから、花の蜜をそっと、なめました。

こうして、U星(ゆうせい)での、コペルくんと椅子(いす)くんの冒険(ぼうけん)が始(はじ)まったんです。

それは、もう、驚(おどろ)くことばかりでした。

子供(こども)の国(くに)からヤパン国(こく)の首都(しゅと)までの、交通(こうつう)きかんはなんと、マンモスみたいなノミの背中(せなか)に乗(の)って、一(ひと)っとびです。

コペルくんが手(て)を上(あ)げました。

「これって、飛行機(ひこうき)なの？　生(い)きているの？」

「心(こころ)があるもの！！」

グリーンボーが、ノミのこがね色(いろ)で、ピッカピッカのあしを、ピタピタたたきながらいいま

した。

「飛行機(ひこうき)と違(ちが)って、ノミには、心(こころ)があるから、こしょうもしょうとつも、ないんだよ！！　今(いま)、この国(くに)では、この心(こころ)を、飛行機(ひこうき)や、ロボットに、取(と)り入(いれ)る研究(けんきゅう)が進(すす)んでいるんだ！！」

グリーンボーは、とくいそうです。

「でもさ、させたらどうする？」

椅子(いす)くんと、コペルくんが首(くび)をすくめました。

「このノミはネ、移民(いみん)が持(も)ってきたものだけど、この国(くに)のかんきょうになれなくて、人間(にんげん)をさすことをやめたんだ！！」

グリーンボーが遠(とお)くを見(み)るような目(め)をしました。

「なんか、見(み)つけたんだな？」

椅子(いす)くんがいいました。

「ぼくたちの育(そだ)てた、クスクス草(そう)を食(たべ)て、急速(きゅうそく)に大(おお)きくなったんだ！！　突然変異(とつぜんへんい)っていうんだよ。　その、ちょうやく力(りょく)は、地球(ちきゅう)でいうなら、東京(とうきょう)から、ニューヨークまで、一(ひと)っ飛(と)びさ！！　そこで、ノミに乗(の)っての空中旅行(くうちゅうりょこう)が、この国(くに)の交通(こうつう)きかんとして発達(はったつ)したんだ！！」

グリーンボーが自(じ)まんしました。

「そう！！　でも、それって、だれがいいだしたの？」

コペルくんの眼(め)がきらきらしています。

「その人(ひと)の名(な)は、コペル。　コペルくんだよ！！」

グリーンボーが笑い出しました。

「ぼくなんだあ？」

コペルくんが飛びあがりました。

。

「U星のコペルくんが、いいだしたんだよ。U星は、ゆれた！！」

「ノミだもんね、それに、子供の思いつきだから！！」

椅子くんが、つぶやきました。

「こがね色、こうてつに、まさるバネ、優しい顔、広い背中、その心で、『コッペルU』は、一やく、人気者になってしまった。国はそれを追かけたんだよ！！」

グリーンボーが、コペルくんの背中をたたくと、きんちょうして、ため込んでいた息が、「ウッフーン」と、都の空に

舞い上っていきました。

王宮に、呼び出されたグリーンボーは、椅子くんと、コペルくんを従え、宮殿のピッカ、ピッカの、ホール中央に、あかい顔をして立っていました。

「『グリーンU』の、ちょうさ結果を申しあげます。『グリーンU』は、クスクス科にぞくする、珍種で、地球に送りこまれて突然変異をおこし、巨大化したものと判明しました。クスクス草は、我国にあって、蜜は夢のような、よいかおりをだし、不老不死の薬として乱獲され、絶滅したと思われていたものです」

ちょうさ官が大臣に報告していました。

「やあ、グリーンボー、きみの、すばらしい研究成果を、まず、喜びたい。　おめでとう！！　子供の国で、絶滅種を、次々発見し、育てることから、はじめたと聞いた・・・・」

一番先に声をかけてきたのは、文部大臣でした。

「やあ、『グリーンU』の、蜜のかおりをかぎつけた国中の蜜蜂が、子供が、老人が、病人が、集まって来ているぞ！！

まず、みんなに分てあげよう！！蜜の保有量は、充分な量だ。国民に与えることで、不老不死を目ざし、その上で将来有望な輸出産業として、育てたい！！」

産業大臣が胸をたたきました。

「おお、グリーンボー、『コッペルU』の成功のあとで、学校嫌いの子供を集めて、子供の国をつくることをていあんしたのが、グリーンボーだったことを、僕たちは、決して忘れない！！」

国王の声を、拍手がつつみました。

青いとんがり屋根の宮殿は、むんむんするほどの熱気で、祝辞と、「カンパイ」がくり返されていました。

「いいもの、見せてやろうか！」

グリーンボーはささやくと、コペルくんと、椅子くんの手をとって、王宮から脱兎のように、逃出しました。

青緑色のサボテンや、黄緑色のからすうりの間を通

るとき、三人は足音をたてずに歩きました。蛇が目の前を横切っても、三人とも驚きませんでした。

やがて、みどりの森のなかに、赤い煉瓦色の学校が見えて来ました。

「あれえ、ぼくのママがいるよ！！」

「あれえ、ぼくのお父さんもいるぞ！！」

「あれは、U星のコペルくんのママと、U星の椅子くんのパパさ。そんなに、びっくりしたの？」

グリーンボーが、ポカーンと、口を開けている、コペルくんと、椅子くんを見て笑いました。

教室からは、楽しそうな、音楽が流れてきました。

「記憶(きおく)は音楽(おんがく)でしましょう。言葉(ことば)は音楽(おんがく)に乗(の)せましょう

オペラ歌手(かしゅ)のように！！」

パパや、ママが歌(うた)っていました。

「記憶(きおく)は絵(え)にしましょう。言葉(ことば)は絵(え)にのせましょう。

漫画(まんが)のように！！」

パパやママが歌(うた)っていました。

「何番(なんばん)まであるのかな？」

椅子(いす)くんがつぶやきました。

「ひらめきは追(お)いかけましょう。子供(こども)のように！！」

パパとママは歌(うた)っていました。

「遊(あそ)びこそ命(いのち)。仕事(しごと)は遊(あそ)びの中(なか)で育(そだ)てましょう。子供(こども)の

ように！！」

パパとママは歌っていました。

U星では、何かが、変ろうとしているようでした。

子供が働き、大人が子供に追いつこうと学んでいました。

公害のない青い空を、『コッペルU』が、金色の輝く線を残して、飛んでいました。

帰り道、Uポートに向かって、三人が、サボテンや、からすうりの間を歩くと、赤い小鳥が、待っていたように、コペルくんの帽子に舞い降ました。

椅子くんの帽子からも、青い小鳥が首を出しました。

いくつもの、朝と、昼と、夜がすぎました。

小鳥たちは、帽子のなかで、卵を温め、小鳥の赤ちゃんは大きくなって、飛べるようになりました。

椅子くんの帽子からも、コペルくんの帽子からも、子供の国の子供たちの帽子からも、色とりどりの小鳥が、一せいに飛立ちました。

それは、まるで、七色の虹が、大空でブランコでもこぐように、回転しながら飛んでいました！！

「こんなに、美しいものを、地球では、見たことも、ない！！」

椅子くんが感激しています。

巣立ってからも、小鳥たちは、帰ってきて、コペルくんや、椅子くんの、頭や、肩や、腕や、指先に止まりました。

「ぼく、こういうのが、夢だったの！！」

コペルくんは大喜びです。

「この帽子を、世界中の子供にあげたら！！　ぼくみたいに嬉しくなる子が、いっぱーい、いるよ！！」

コペルくんがいい出しました。

「大人だって、見ているだけでも、幸福になれるさ！！」

椅子くんが青い小鳥を指先に止まらせていいました。

「そうか！！　気づかなかったな。『幸福の帽子』を、

幸福を、売るんだ！！」

グリーンボーの声が、高くなりました。

子供の国では、みんな楽しそうに遊んでいました。

いや、働いていました。

帽子の出荷が始まったんです。

「でも、世界中で、帽子が、小鳥が、いじめられたらど

うしよう？」 コペルくんが心配しています。

「いじめられた帽子は、帽子の木に逃るんだよ！！　だ

から、心配ないんだ！！」

みんなが笑いました。

「そう、インプット、されてんだよ！！　みんな、いじめられっ子だったから、その点、抜かりはないさ！！」

グリーンボーが森のノッポの木を指さしていいました。

帽子の木には、帽子が花のように咲いていました。

「ごめんなさい！！　と、いっても？」

椅子くんが、小さくつぶやきました。

「そうネ。ごめんなさいといったら、ごめんなさいといったら一度だけは、許してあげても、いいんじゃないかなあ？」

コペルくんと椅子くんに帽子をくれた、ももかちゃんが、考え深そうにいいました。

「ＯＫ！！」「ＯＫ！！」「ＯＫよ！！」「ＯＫで

す！！」

みんなが、手をあげました。

グリーンボーが、約束をパソコンに打込むと、帽子の木から、帽子が、つぎつぎに、いじめっ子のもとへ帰っていきました！！

「きみたち、知ないだろうけど、地球から、この国に来た人はきみたちが始めてでは、ないんだよ！！」

グリーンボーが、いたずらっ子みたいな顔をしていいました。

「ほんと！！」二人は飛びあがりました。

「そう、三百年前！！　忍者がこの国にやってきたん

だ！！忍者の名は、サルトビ、サンスケ。サンスケはこの国の若者を集めて、忍術を教えたんだ。今でも忍者はたくさんいるよ！！」

いって、グリーンボーは、バク転をしました。

「そんな？」
「だいいち、サンスケじゃないよ？　サルトビ、サスケだろう？　サンスケなんて、言ったら命がないぞ！！」

椅子くんが子供たちを見回しました。

「ぼくたち、忍者！！」

後ろで声がして、目の前の子供たちが、一せいに消ました。

「木遁の術です！！　木に逃げる、木に隠れる術です」

二人の前に、子供たちは舞降ました。

「三百年たって、この国の忍者たちは科学者になりました！！

サルトビ、サンスケの科学と、心理学に根ざした戦術が、技術が、今でも、この国に生つづけているんです！！」

グリーンボーも、子供たちも、昔の地球人の話を、自国の英雄の話でもするように、楽しそうに目をきらきらさせて、話しました。

「ぼくたちは、彼を、追いかけて、追いかけて飛びまーす！！」

U星の子供たちが、一せいに、おどり上りました。みんな、驚くほど身軽なようです。

「きみたち、『通訳くん』に、気づいた？」

グリーンボーが、耳をそっと、押えました。

「気づいたさ！　地球にいた時から！」

椅子くんが、目をごしごしこすりました。

コペルくんが手を上げました。

「『通訳くん』て、人間の言葉も、動物の言葉も、鳥や虫の言葉も、木や草の言葉も、通訳できるの？」

「そうだよ！！」

U星の子供たちが答ました。

「ある日、コペルくんが、『せみは人間の言葉をわかっているよ。一緒に歌って、楽かった！！』と言ったんだ。これを聞いて　ぼくたちは飛んだ」

グリーンボーが、手のひらに、耳栓みたいな小さなものを乗せていいました。

「ぼくたちは観察し、データーをとることから始めたんだ！！」

けんけんが、大変だった日々を、思い出したように天をあおぎました。

透明な耳栓には、渦巻状の、らせんが見え、小さな空気袋がふくらんでいました。

「『通訳くん』を持っていないのに、ぼくに言葉がわかるのは、親機のエリアにいるということ？」

椅子くんが聞きました。

「あたりー！！」 U星の子供たちが、両手を上ました。

「この空気の袋は、カクセイキなんだネ！！　ハッハーン！！」

コペルくんが、ため息をつきました。

今度は、U星の子供たちは、誰も、笑いませんでした。

その夜、この幸福な子供の国に、何かが、やってきました。

目玉が二つ、浮き出し、八つ浮き出し。まわりに沢山の二つ並びの目玉がふえました。

「獣だ！！」

「虎だ！！」

「うえて、のら猫が、虎になったのに違ない！！」

誰かがいいました。

「おいしそうな、子供の匂いをかぎつけて、ここまで、やってきたんだよ！！」

グリーンボーの声まで、ふるえていました。

獣が目を地面に並べ、一せいに、うなりだしました。

獣の、うなり声は、どっく、どっくと、脈打って聞こえ、

うなり声に乗って、子供たちは、体を上下させました。

「ウオ、ウオー、ウオッ！！　ウオ、ウオー、ウオッ！！
ウオ、ウオーウオーウオッ！！‥‥‥‥‥‥」

声は大地をたたき、子供の国の家が、はしから、た

おれはじめました。

「『通訳(つうやく)くん』は、どこ？」

椅子(いす)くんが聞(きき)ました。

「獣(けもの)のデーターは、入(はい)っていないんだ」

誰かが小さな声で答えました。

獣(けもの)がいっせいに、暗(くら)やみの子供(こども)たちに向(むか)って、おそいかかりました！！

「ギャオーッ、ギャオーッ、ギャオーッ、ギャギャギャッ」
「ギャオーッ、ギャオーッ、ギャオーッ、ギャギャギャッ」

もうだめ！！　もうー、だめー！！

そう思(おも)ったとき、ごう音(おん)がして、

「パッ　パッ　パッ　パッ、パ　パ　パパパパパ、パ」

と、炎(ほのお)がはじけ、空気(くうき)が、もえ上(あが)りました。

炎の底で、こわーい顔をした獣たちが、もがきまくり狂いまくっています。

その断末魔、火だるまになった獣たちは、態勢を、なんとか立直すと炎の風になって逃走しました。

気がつくと、みんなは、手をつなぎ、赤い顔をして、煙幕の中で浮いていました。

「火遁の術です！！」

グリーンボーが、U星の子供たちと、嬉しそうに、ハイタッチを、くり返しています。

「もう、食られちゃった、と、思ったもん。　ウッフン！！」

コペルくんの、ため息が、U星の夜空を、ふるえながら

昇(のぼ)っていきました。

「おそくなりました！！　獣(けもの)のデーター、入力完了(にゅうりょくかんりょう)！！

これで、『通訳(つうやく)くん』の盲点(もうてん)は、かいけつしました。　完(かん)ぺきです！！」

　グリーンボーは、自信満々(じしんまんまん)、いつも上(うえ)を見(み)ていました。

「グリーンボーは、ほんとに、学校嫌(がっこうぎら)い、だったの？」

　椅子(いす)くんが聞(き)きました。とても、しんじられないというように。

　コペルくんも立(た)ち上(あ)がりました。

「そうだよ！！　ぼく、いじめられっ子(こ)だったんだ！！

いじめられるのが、こわくて、こわくて。ぼくは、本当(ほんとう)の馬鹿(ばか)で、弱虫(よわむし)なんだよと、先手(せんて)をうって、いいふらしたりしたけど、ますますいじめはひどくなった・・・」

「ぼくは、わざと、しけんもんだいを間違えたり、先生にあてられても、とちったりした！！」

椅子くんがいいました。

「小さな、ぼくの上には、何時も大きな、いじめっ子が乗っかっていたんだ！」

コペルくんも、つぶやきました。

グリーンボーは立ち上がると、二人の手をとり、バンザイをして叫びました。椅子くんもコペルくんも叫びました。

「そこで、ぼくたち、団子虫に、なりました！！」

味方をえた、子供の国の子供たちが、嬉しそうに笑いころげました。

緑に囲まれた、美しい白かべの大学の中を、小さな子供が走っていました。

友達はそれに気づくと、ひょいと、肩車に乗せました。

楽しそうな笑い声があがり、みんなは、子供のお尻をペンペンたたきました。

「あれが、U星のコペルくんだよ！！」

グリーンボーが、コペルくんをふり返りました。

コペルくんの頭がゆれています。

「めまいの中にいるぼくと、めまいの外にいるぼく？」

コペルくんが寄り目になって、自分の中をのぞいていました。

「コペルくんは、飛び飛び、飛びの、飛び級で、今

大学いんに、いるんだよ！！」

グリーンボーが、嬉しそうに、いいました。

理学部のじっけんとうは、広い広い草原のなか、舟のように浮いていました。

「これが、クスクス草だ。『コッペルU』の餌だよ！！」

グリーンボーが青緑色の葉っぱを、太陽にかざしながら、いいました。

コペルくんと椅子くんが、見上ると、グリーンボーの手の中で、クスクス草は金色のキャンデーみたいに、とけました。

じっけんとうでは、やごや、さまざまな、幼虫が育っていました。

「これは、世界一美しい、蝶や、とんぼや、美しい歌を

歌う、せみの幼虫だよ。 飛び回る姿が浮かんでくるなあ！！」

グリーンボーが、吹き抜けの空を見上ました。

「幼虫の時間だから、先の話だけど、人間に、被害はないのかなあ？」

椅子くんが考え込みました。

「それは、わかんない！！ けど、面白ーい！！」

コペルくんと、U星のコペルくんの声が、一つになりました。

そこで、二人は、自分をまもって、きりきり舞いを始ました。

「きみは、ぼくなの？」
「ぼくは、きみなの？」
「ぼくは、ぼくなのに？」「きみは、きみなのに？」

「ぼくは、団子虫なの！ きみは、きらきら星！！」

「ぼくも、団子虫(だんごむし)だったもん！」

「なら、きみは、ぼくなの？」

「たぶん！！」

コペルくんが飛(と)び上(あが)りました。

植物園(しょくぶつえん)のなかを、二人(ふたり)のコペルくんが走(はし)り回(まわ)っていました。

「これが、コペルくんの出会(であい)だ。コペルくんらしいなあ！！きみも、U星(ゆうせい)の椅子(いす)くんに、出会(であい)たくなったか？」

グリーンボーが、椅子(いす)くんをみつめました。

「ああ！！」

椅子(いす)くんが目(め)を、ごしごしこすりました。

「これを、見(み)て！！」

U星(ゆうせい)のコペルくんが、手(て)をあげています。 見(み)ると、

かいこが、桑の木の枝に、大きな、色とりどりのまゆを、かけていました。

「この糸をつむぐと、糸は、うたうんだよ、音楽を歌うんだ！！」

「じゃあ、花や木も、うたうの？」

コペルくんが、大きく息を吸いこみました。

植物園のなかでは、木々が、特大な、くだものを実らせ、青いバラや、チューリップが咲きほこっていました。

「ああ、そうだよ！！」

U星のコペルくんは、手をあげると、そっと、そよ風を呼びました。

手を振ると、そよ風が、やさしく、木の葉や花の頭をなでていきます。

「ヒーラ、ヒラヒラ、ヒーラ、ヒラヒラ、ソソソソ、ソソソソソ、ソソソソ、走(は)って！！　揺(ゆ)れて、揺(ゆ)れて、揺(ゆ)れて、泣(な)いて、泣(な)いて、泣(な)いて、キュキュキュ、キラ、キラ、キュキュキュ、キラ、キラ。　ハッピピ、ピーチク、笑(わら)って、笑(わら)って、笑(わら)って、花(はな)も、風(かぜ)も歌(うた)うよ！！　花(はな)も、風(かぜ)も踊(おど)るよ！！」

それは、重唱(じゅうしょう)で始(はじ)まりました。それから、アリアに！！

グリーンボーが、いつの間(ま)にか、前(まえ)に立(た)っていました。

ママは、隠(かく)れた、かくれんぼ！！

十を数(かぞ)えて探(さが)しても、

二十数(かぞ)えて探(さが)しても、

百(ひゃく)を数(かぞ)えて探(さが)しても、

どこにも姿(すがた)はありません。

泣(な)いて、泣(な)いて探(さが)しても、

迷(まよ)って、迷(まよ)って探(さが)しても、

どこにも姿(すがた)はありません。

数(かぞ)える数(かず)は、つきません。

空(そら)に流(なが)れる、白(しろ)い雲(くも)、

秋(あき)も、なかばになりました。

チュル、ル、泣(な)いて、

チュル、ル、迷(まよ)って、

チュル、ル、笑(わら)って、歌(うた)って、

ぼくは、ママを見(み)つけました！！

ぼくは、ママを見(み)つけました！！

ママは、ぼくのなかで、笑(わら)っていたから！！

ママは、ぼくと一緒(いっしょ)に、歌(うた)っていたから！！

チュル、ル、チュル、チュル！　ハピピ、ピーチク、ハピネス！

チュル、チュル、チュルー　チュル、チュル、チュルー。ハピピ、ピーチク、ハピネス！

チュル、ル、迷(まよ)って！！

チュル、ル、歌(うた)って！！　夢見(ゆめみ)て！！　夢見(ゆめみ)て！！」

花(はな)も、葉(は)っぱも、子供(こども)たちも、歌(うた)いました。

高(たか)い木(き)を、太陽(たいよう)の光(ひかり)が引(ひ)っ張(ぱ)っています。葉先(はさき)に止(と)まっていた泡(あわ)が、青(あお)い、青(あお)い、U星(ゆうせい)の空(そら)に、くすぐったいような無数(むすう)の線(せん)を描(え)がいて、舞上(まいあ)がりました。

U星の子供たちが、アーケードに、むらがっていました。みんな、おみやげを買込んでいるようです。

今日は、子供の国の月給日で、パパやママの家に帰る日です。みんな嬉しそうでした。

「『そうなら、ぴったりの国があるさ、大人が学校に行って、子供が働くんだ、お金をもらって！』って、地球の森で、グリーンボーが話したの、おぼえてる？　この国のことだったんだネ！！」

椅子くんが、コペルくんを振返って、いいました。

広場は、子供の帰りを待ちわびる家族で、あふれ返

っていました。

「これが、地球(ちきゅう)から来(き)た、椅子(いす)くんと、コペルくんです！！」

パパやママに、グリーンボーが紹介(しょうかい)しました。

U星(ゆうせい)のコペルくんのママが、おどりだしました。

それは、すてきに！！

「ララララ、ラ、わたしには、わかっていたわ。ララ、ある日(ひ)、宇宙(うちゅう)のはてから、わが子(こ)がやって来(く)ることが！！」

パパやママたちが、道(みち)を開(あ)けました。

「ララララ、ラララ、わたしには、わかっていたのよ。ララララ、その子が、きらきら星(ぼし)であることが！！　ララララ、ラララ、ララララーー！！」

U星(ゆうせい)の、コペルくんのママは、泣(な)き出(だ)しそうなコペルくん

の手をとりました。 左手はU星のコペルくんが握っています。

輪は、パパや、ママも加え、おどりながら広がっていきました。

人の輪は、ジジや、ババも加えて、嬉しそうに活気づいていきました。

踊りつかれ、息をきらせて、芝生で一休みしている、パパや、ママに向かって、「学校嫌いな子供たち」が、声を張あげました。

「でー、パパや、ママの、学校での成果は、なーに？」

「パパたちは、飛びっきりの、小さな、小さなものを、考えているんだよ！！」 すかさず、パパの声が返ってきました。

「たとえば、なーに！！」子供(こども)たちが聞(きき)ました。

「たとえば、体(からだ)の中(なか)を歩(ある)き回(まわ)る、小(ちい)さな、小(ちい)さな、おいしゃさま！！」 パパがいいました。

「たとえば、シャボン玉気球(だまききゅう)！！　たとえば、友達(ともだち)ペンダント！！」 ママがいいました。 みんなが、笑(わら)い出(だ)しました。

「たとえば、万能(ばんのう)メガネさん！！　たとえば、万能(ばんのう)シューズくん！！」 ママたちが叫(さけ)びました。

「パパたちは、もっともっと、大(おお)きなものも考(かんが)えているんだよ！！」

パパが言(い)いました。

「たとえば、なあに？」 子供(こども)たちが叫(さけ)びました。

「たとえば、大気洗浄(たいきせんじょう)タワー！！」

「たとえば、風向変更扇（ふうこうへんこうせん）！！　せんは、換気扇（かんきせん）のせんだよ！！」

子供（こども）たちは負（ま）けてはいないぞ、と、声（こえ）を張（は）り上（あ）げました。

「たとえば、台風（たいふう）の赤（あか）ちゃん、アップップ、大作戦（だいさくせん）！！」

「たとえば、空飛（そらと）ぶ、翼（つばさ）くん！！」

日（ひ）が暮（く）れて、U星（ゆうせい）の空（そら）には、無数（むすう）の星（ほし）が光（ひか）っていました。

第　3　章

「あなたは、やさしいのね！」 グリーンボーのママがいいました。

「さあ？」 椅子（いす）くんが、とまどっています。

何処にもママの姿は見えません。

グリーンボーの部屋の、テーブルの上には、青銅色のせみかざりのついた、オルゴールの箱が乗っていました。

「飛びなさい！！」 ママの声がしました。

「ああ！！」 椅子くんが目をごしごしこすりました。

せみかざりが、動いたような気がしました？

「あなたに、応援歌を、歌ってあげましょう！！」

ママがいいました。

「リリリ、リーン、リリリ、リーン、リリリリリリリ、リリリ、リーン、リリリ、リリリリ、ベンチボー！！　シュワシュワ、シュワー、シュワシュワ、シュワー、ハッピピ、ピーチク、ベンチボー！！ベンチボー！！　ベンチボー！！」

それは、ハンドベルみたいな、すんだ音で、どこかで、パ

チッ、パチッという、はじけるような、音がしていました。

コペルくんは、U星のコペルくんの家に、招待されて留守でした。椅子くんに、夕食をご馳走してくれると、買い物に出て行った、グリーンボーが帰ってきました。

「僕のママと、話していたの？　僕のママはね、亡くなって三年になるんだ。こんな、せみの姿でも、とにかく、帰って来てくれた時は、嬉しかったな！！」

グリーンボーが、ペチュニアの花を一輪、オルゴールの前に、そっと、おいていいました。

椅子くんの目から、何故か、涙があふれました。

「せみはね、たぐいまれな音楽家で、音を、言葉を理解

することが出来るんだよ。V字型の発音筋と、二個の発音板と、一個の共鳴室を持っているんだ。血の一滴もないせみは、ほんの少しの樹液や、露で生ることが出来るから、心が、たましいが、宿るには、こんなにふさわしいところは、ないのかもしれない？」

グリーンボーは、見たこともないような、やさしい目をして、せみ飾りを見ていました。

見ると、せみの翅が光を反射させ、金色に輝やいています。

「椅子くんは、せみになった僕のママに、よく、気がついたね。きみのママに似ていたのかな？　ぼくなんか、コペルくんに言われて、やっと、気がついたのに！！」

グリーンボーが、こぶしをにぎっているのがわかりまし

た。

「くやしかったよ！！　あんな、小さな子に言れて、気づくなんて。ぼくのママなのに‥‥。そんな自分が許せなかった。あのころ、『コッペルU』の成功もあって、コペルくんの、ひらめきは、大当りすると、評判になっていた。それに、ぼくたちは、飛びついたんだ。あせってもいた。でも、ね、ぼくもママと話したくて、話したくって！！　もう、気違いみたいになってさ。それで、『通訳くん』を思いついたってわけさ。そしたら、それが、大ヒットになったんだ！！」

「そう、『通訳くん』の思いつきは、そこから、だったのか。で、お金持になれたの？」 椅子くんが聞ました。

「お金は、国のものさ。ぼくたちのものではないん

だ！！」

グリーンボーは、顔を左右に振ると、椅子くんの肩をそっと抱いていいました。

U星主催の、「お宅ショウ」は、にぎわって、『宇宙ベンチ』はU星の青空に、ゆらゆら、幸福そうに浮かんでいました。

「ぼくら、魔法つかい！！　あなたの望みを、かなえてあげましょう！！」

「わたしたちの名は雲！！　または、そよ風！！」

「ぼくたちは、ロボット！！　だからこそ、心あります！！」

「わたしたち、宇宙の旅人！！　主食は夢！！」

「さて、ぼくら、忍者サルトビ、サンスケトリオで、ござい

ます！！　忍術の極意をあなたに！！」

『宇宙ベンチ』は好評で、次々に、誕生した、新しいカップルが、トリオが、マスコミのマイクに向かって、嬉しそうに、笑いを広げていました。

並んで座れば、たちどころに、愛するカップルが、トリオが、成立する！！　本物の、恋人、友達に、なれるとあって、「お宅ショウ」の、目玉になっていました。

空中散歩のあとで、レインボーブリッジを渡る楽しさが、またも評判を呼んで、長い長い列ができました。

「‥‥ベンチは、僕のすべてでした。公園のベンチで妻と出会い、愛し合い、その子供には、ぼくたちの、幸福

のシンボルである、ベンチと名づけました！！‥」

拡声器から、授賞者の言葉が流れて来ました。

「‥‥おめでとうございます。グランプリを授賞された、

『宇宙ベンチ』作者、喜びの声でした！！」

椅子くんは走りだしました。

今、聞えたのは、確に、お父さんの声でした。お母さん

が亡くなってから、酔っぱらいつづけていたのに？

酔っぱらっていない、お父さんの声を聞くのは、何年ぶ

りになるでしょうか？

椅子くんが息をきらせて、会場にたどりついたとき、グラ

ンプリの授賞式はもう終って、会場は、部門別の紹介

に移っていました。

そこには、お父(とう)さんの姿(すがた)は、ありませんでした。

ぼくのお父(とう)さんは、もとのお父(とう)さんに、もどったんだ、

そのしょうこに、お父(とう)さんの夢(ゆめ)見(み)てきた『宇宙(うちゅう)ベンチ』

を遂(つい)に完成(かんせい)させたんだもん！！

椅子(いす)くんは、幸福(こうふく)そうなカップルを乗(の)せ、大空(おおぞら)でゆらゆ

ら揺(ゆ)れる宇宙(うちゅう)ベンチを、見(み)つめました。

暮(くれ)かけた、U星(ゆうせい)の森(もり)の、無数(むすう)の葉(は)っぱが、オレンジ色

に燃(もえ)立(た)ちました。

若(わか)い恋人(こいびと)をのせた、最後(さいご)の宇宙(うちゅう)ベンチが渡(わた)りきると、

「お宅(たく)ショウ」のレインボーブリッジは、オーロラになって

舞(あ)い上(あ)がり、長(なが)い尾(お)を引(ひ)いて、U星(ゆうせい)の空(そら)に消(きえ)ていきまし

た。

U星の森は、夏に向って、緑の葉をしげらせ、なつかしい匂いでむんむんしていました。

それは、みどりの匂いです。

「お帰りなさい！！　お帰りなさい！！　グリーングリーングリーンボー、グリーングリーン、グリーンボーイ！！　わたしたちの息子、わたしたちの坊や！！」

森の葉っぱが、小鳥が、ちょうが、せみが歌っていました。

「森の坊や！！　森のきぼう！！　森のほこり！！

グリーングリーン、グリーンボー！！　グリーングリーン、グリーンボー！！」

森の小道を三人は手をつないで歩きました。小鳥も

鳴いていました。ちょうも飛かっていました。

　だんご虫がころころと、ころがりました。

「森はね、グリーンボーイの名づけ親なんだ！！　僕が飛立つことができたのは、森のおかげなんだよ！！」

　グリーンボーが、一番大切なものを見せるようにいいました。

「グリーングリーン、グリーンボー！！　グリーングリーングリーンボー！！　わたしたちの希望！！　わたしたちの夢！！」

　森の歌声にあわせて、グリーンボーはステップをふみました。

　コペルくんも、椅子くんも、ステップをふんでいました。

　森が身動きしました。

森の木が、葉っぱが、ステップをふんでいます。

気がつくと、森が、森全体で、ステップをふんでいました。

「お帰りなさい！！　お帰りなさい！！　グリーングリーン、グリーンボー、グリーングリーン、グリーンボーイ！！わたしたちの息子、わたしたちの坊や！！」

森の声が、森の歌が、満足そうに、力強く、走っていました。

森は浮上がりました！！

森は飛んでいました！！

青い青い、見るものの心に、しみ入るような夏空のなかを。

「ぼくは、森の翼！！　エンジンは、情熱！！」

グリーンボーの声がしました。

「ぼくの情熱で、森だって持ち上てみせるさ！！　それが、森の希望なら！！　ぼく、なんだってする！！　なんだって、できる！！」

森は数えきれないほどの緑色の葉っぱを、浮力に、飛んでいました。

無数の、シャボン玉のような泡をふりまきながら、幸福そうに飛んでいました。真青な蒼のなかを！！

「森だって、一度くらいは、走ったり、飛んでみたかたに違いないさ！！」

椅子くんがつぶやきました。

グリーンボーと、コペルくんが、ハイタッチを繰返してい

ます。

森(もり)は静(しず)かに着地(ちゃくち)しました！！

椅子(いす)くんは、何(なに)かが耳(みみ)に引(ひ)っかかっていることに、気(き)づきました。

『ベンチは僕(ぼく)のすべてでした。ベンチで妻(つま)と出(で)会(あ)い子供(こども)はベンチと名(な)づけました！！』

それは、ベンチくんのパパの声(こえ)でした。

「これから、案内(あんない)するよ。ベンチくんの、パパのところへ！！」

グリーンボーが、椅子(いす)くんの考(かんが)えていることが、わかったように、椅子(いす)くんを見(み)つめていいました。

「‥‥妻を失なった、かなしみの底から、ぼくは、虹のそばまで行って見たい！』という、妻の夢に。消える虹の曲線を、夢見つづけた妻のもとに、立ち帰ったんです」

ベンチくんのパパが話していました。

「それで、宇宙ベンチを？」

椅子くんがつぶやきました。

「そうです。宇宙ベンチの成功で、気がついたら、ぼく、悲しみの底から、浮び上がっていました！！」

そこは、U星のベンチくんのパパの工房で、近所の人たちや、宇宙ベンチに魅られた人たちが、集まっていま

た。

　ベンチくんのパパが、椅子(いす)くんの、つぶやきをとらえました。

「きみも、もしかしたら、地球(ちきゅう)で、ベンチくんの名前(なまえ)で、いじめられていたんですか？」

「そうです！！」

　椅子(いす)くんが、挑戦(ちょうせん)するように、いいました。

「だって、ベンチなんて、人間(にんげん)につける名前(なまえ)ではないもの？　自分(じぶん)の子供(こども)が、他人(たにん)の尻(しり)の下(した)になるんだとは、考(かんが)えつかなかったんですか？　みんなは、ぼくを椅子(いす)にしようとしました。オシッコをした子(こ)も、ウンチをした子(こ)もいました！！」

　椅子(いす)くんの目(め)から涙(なみだ)があふれました。

「つづけて下(くだ)さい！」

ベンチくんのパパがいいました。

「でも、ぼくは、いじめられていることを、お父さんやお母さんには、だまっていました。口にすることも、許せなかったんです！！　ぼくは考えて、考えて、団子虫になりました。

いじめがいのないものに、なったつもりでした！！」

そこで、椅子くんは大きく息を吸込みました。

「気がついたら、いじめは、なくなっていました。だから、もういいんです。それより、お母さんの亡くなった後、酔っぱらいつづけてきた、ぼくのお父さんも、浮き上がることが、出来たのでしょうか？」

椅子くんは、そのことが、気になってならなかったようです。

「兄弟星でも、U星と地球の間には、時差があって、

きみたちは地球の未来にいるんですよ。だから、お父さ

んのことは、心配ありません。　ぼくを見てください！！」

　ベンチくんのパパが立上がりました。その姿には、やさしさが、たくましさが、にじんでいました。

「で、きみには、将来なりたい理想像でも、あるんですか？」

　ベンチくんのパパが、話題を変ました。

「あります！！　あります！！　それは、グリーンボーです！！」

　椅子くんは、どきどきしました。

　誰も笑ませんでした。

「ぼくは、ベンチくんだけど、いつかは、グリーンボーみた

いに、なりたいんです！！」

椅子(いす)くんが、鼻(はな)の下(した)を、ごしごしこすりました。

「いいぞー！！」「がんばれー！！」「負(まけ)るな！！」「ぼくたちがついているぞ！！」

拍手(はくしゅ)が、椅子(いす)くんを力(ちから)づけるように、大(おお)きくなりました。

そのときでした。グリーンボーが、みんなを押(おさ)えるように立(たち)あがったんです。

そして、椅子(いす)くんの前(まえ)で、向(む)きをかえました。

「ぼくが、ぼくが、その、U星(ゆうせい)のベンチくんだよ！！　ぼくは、ほんものの、ベンチくんです！！」

突然(とつぜん)、グリーンボーがいいだしました。

ヒェー？　ヒェー？　ヒェー？　ヒェー？　ヒェー　ヒェ

ー？　ヒェー　ヒェー？

集っていた人たちが、それぞれ、何か叫びながら、立ち上りました。

「椅子くんは、地球の。ぼくが、U星のベンチくんなんです！！　みんな、忘れてしまいましたか？　この家のいじめられっ子のことを！！　この町のベンチくんは、グリーンボーになりました！！」

ヒャー？　ヒャー？　ヒャー？　ヒャー？　ヒャー　ヒャー？　ヒャー　ヒャー？

人々のざわめきは、いつまでも、いつまでも、つづきました。

「信じられない人は、この椅子にかけて下さい。ここは、ぼくの工房、宇宙ベンチに、どうぞ！！」

ベンチくんのパパが、笑いながら、いいました。

「まさか？」

「あの、ひねくれものの、泣きべそくんが？」

もしかしたら、自分も、あの、ベンチくんを、いじめていたのではないかと？　肩をせまくし、思い余り、混乱する人々を眺めていたコペルくんが、手を上ました。

「ぼくは、わかっていたよ！！　だってね、グリーンボーと椅子くんの耳が、おんなじ、なんだもん！！」

「うそ？　ほんと？」「エヘヘ、アハハハ」「そう、なんだー！！」

なんだか、みんな、おかしくって、おかしくて、笑だしました。

耳の形ほど、個性のあるものは無ことを、U星のひとたちも、気がついていました。

「グリーンボーイって、みどりん坊(ぼう)、森(もり)の坊(ぼう)やのことです。森(もり)が名(な)づけてくれたんです！！」

グリーンボーが、あらためて、椅子(いす)くんに、思(おも)いをこめて、ハイタッチしました。グリーンボーの方(ほう)が、椅子(いす)くんより、すこしだけ背(せ)が高(たか)いようです。

コペルくんも飛上(とびあが)って、ハイタッチしました。ハイタッチは笑(わら)いながら、歌(うたい)ながら、人(ひと)から人(ひと)へ、送(おく)られていきました。

「グリーングリーン、グリーンボー。グリーングリーン、グリーンボー、ぼくたちの希望(きぼう)、ぼくたちの夢(ゆめ)！！」

みると、グリーンボーの胸(むね)に、せみが一匹止(いっぴきと)まっていました。

「あっ！！　ママだ！！」

言ってから、椅子くんはあわてて、口を押さえました。

不思議な風が吹いていました。

庭の木に、たくさんのせみが、風に乗って舞降ました。

見回しても、ベンチくんのパパの工房には、もう、人影もまばらで、三人のほかには、気づいた人は、ありませんでした。

せみの合唱がはじまりました。グリーンボーのママが歌うと、せみたちがあとを追って歌いました。

その音は、ハンドベルみたいに、とても澄んでいて、聞いているものの心に、優しく、しみ通っていきます。

「リリリ、リリリリ、リリリ、リーン、リリリ、リリリリ、リリリ、

リーン。リリリリ、リリー、リリリリ、リリー、リリリ、リリリリ、リリリ、リーン・・・・・」

せみたちは、歌(うた)いました。

せみたちの歌声(うたごえ)が、白(しろ)い太陽(たいよう)のまつげを長(なが)く伸(のば)して震(ふる)えました。せみたちが現在(げんざい)なのか、過去(かこ)なのか、それとも未来(みらい)なのか、椅子(いす)くんには、わかりません。

「何(なに)を、伝(つた)えようとしているの？」

椅子(いす)くんが振(ふり)かえると、グリーンボーも、コペルくんも、目(め)を閉(と)じて、じっと、聞(き)きいっていました。

それは、旅立(たびたち)ちの歌(うた)のようでした？

明(あか)るい、くり色(いろ)の髪(かみ)は自由(じゆう)をもとめて、毛先(けさき)でくるくる

はねていました。眉はやさしくカーブし、まつげの長い、大きく見開かれた目には好奇心が、あふれていました。

太目で、ちょっとだけ、上を向いている鼻、形のいい、表情ゆたかな唇、くちもとには、けっさくの、仕上げでもするように、小さな句点のような、あざが一つありました。

コペルくんと、U星のコペルくんが、大学の講堂にある、大きな鏡の前に立っていました。

一人は黄色のパジャマ姿で、一人は、グレーのスーツを着ていました。

着ているものが違っていましたから、くべつはできます。

でも、よく似ていました。

「そっくり！！」

コペルくんと、U星のコペルくんが、顔を見合せました。

そこで、二人(ふたり)は、自分(じぶん)をまもって、きりきり舞(ま)いを始(はじめ)ました。

「きみは、ぼくなの？」
「ぼくは、きみなの？」
「ぼくは、ぼくなのに？」
「きみは、きみなのに？」

「ぼくは、団子虫(だんごむし)なの！　きみは、きらきら星(ぼし)！！」

「ぼくも、団子虫(だんごむし)だったもん！」

「なら、きみは、ぼくなの？」
「さあ？」

二人(ふたり)は、始(はじ)めて出会(で あ)った時(とき)と、同(おなじ)じことを繰(く)り返(かえ)します。

それが、出会(で あ)いの行事(ぎょうじ)だとでもいうように！！

まるで、魔法(まほう)の呪文(じゅもん)を、となえるみたいに！！

「もしかして？　もしかしたら？」二人(ふたり)は飛(とび)あがります。

「宇宙のどこかに、ぼくたちの兄弟星が、三つ子の星の三つめの星が？」

「あーる？　なーい？」

「あーる？　なーい？」

ふたりは、同時に口の前に指を一本たてました。

「これは、秘密！！　でも、この宇宙には、まだ、まだ、生物の生るための水を、持っている星は、いくつか、あるよ。　ぼく、見当はつけているんだ！！」

「きみ、大学いんで、そんな研究をしているの？　このあいだは、音楽で、その前は遺伝子の研究をしていると話してくれた。どれも面白かったのに、今度は、宇宙？」

コペルくんが悲鳴をあげました。

U星のコペルくんの目が夢見るように、細くなりまし

た。

「そう！！　まだまだ、宇宙の謎は、たくさん、たくさん、たくさーん、あるんだよ！！　こんなにーーーー」

言って、U星のコペルくんは、両手を広げ、校庭を一周してみせました。

「宇宙も、一つではなくって、たくさんあるんだ。　ぼくたちの住んでいるのは、太陽を中心に回っている、太陽系だけど、ほかにも、銀河系もあるし、銀河系には、巨大な、ブラックホールが、あるんだよ。これが、また、面白ーい！！　それに、新しい星も生まれているらしい？　ぼく、そんな不思議から、目が離せなく、なってしまったんだもの！！」

U星のコペルくんは、いっきに言うと、楽しくってたまらないというように、バク転をしました。

見ていた、学友たちから、やんやの、拍手が巻き起りました。U星のコペルくんは、人気者のようです。

「ぼく、運動が、にがてなんだよ。　きみは、どう？　バク転も、やっとこ、できるようになったところさ！！　この国では、ニンジャの血をひいているのか？　子供から大人まで、バク転なんて、ヘッチャラなんだ。みんなは、ぼくの苦手を、知っているのに‥‥。　この拍手も、お尻ぺんぺんも、みんな、いじめ、じゃ、ないのかなあ？」

U星のコペルくんが、はずかしそうに笑いました。

年上の学友たちの、手荒い友情を持てあまして、でも、いるように！

「きみも、コペルくんて、いうのかい？　地球でも、コペルニクスは、有名なのかな？　地動説は受け入れられてい

るって、わけか？」

二メートルはありそうな、学友(がくゆう)が、近寄(ちかよ)ってくると、珍らしいものを見(み)るように、コペルくんを、見(み)おろしました。

「さあ、ぼく、知(し)りません？　わかりません。 でも、ママからは、聞(き)いたことが、あったような？　ないような？」

コペルくんは、急(きゅう)に、見降(みおろ)されて何(なに)が何(なん)だか、わからなくなってしまいました。

パジャマ姿(すがた)が、気(き)になりました。

でも、グリーンボーが『目印(めじるし)になるから、着(き)ていくように！！　それに、よく似合(にあ)っているよ』と、いって送(おく)り出(だ)してくれたんですから。

「U星(ゆうせい)は自転(じてん)をして、太陽(たいよう)の回(まわ)りをまわるけど、きみの

いる地球も、同じなんじゃないかな？　地球と、U星は、双子星だもの。でなくて、コペルなんて名前をつけるわけ、ないんだから！！」

U星のコペルくんが、助け舟をだしました。

「同じようでも、同じじゃないぞ！！　宇宙での場所が、正反対なんだからな！！双子星だからって、何もかもおなじではないさ」

U星のコペルくんの、背高ノッポの学友は、いっしゅん色を失った空を指さしていいました。

「そんなことくらい、知っています！！　地球のぼくは、いま、未来にいることを！！」

二人のコペルくんの声が、重なりました。

そのあとです。U星のコペルくんの学友の間で、

混乱が起きたのは？

「あれれ、いま、どっちのコペルくんが、話したんだ？」

「さあ？」

「でもさ、地球にも、コペルくんが、いたってことは、ぼくたちも、地球にいるってことだよ！！」

「きみ、地球で、ぼくを見かけたことは、なかったかな？」

「さあ？」 コペルくんは、うつむいていました。

「ああ、わたしも。 きみに会ったことがあるような気がするんだけど？ こんな、美人のお姉さんに、地球で、出会った覚えないかなあ」

「さあ？」 コペルくんは、上目づかいに、女子学生をみました。

「あれえ？　ぼくも、ぼくも、地球にいるの！！」

「たぶん？」 U星のコペルくんが答えました。

「それって、不思議だよねえ！！　ロマンだねえ！！」

「なんだか、嬉しい！！」

「ぼく、泣けて来るなあ。だって、ぼくが、もう一人、宇宙上にいるんだよ！！」

「さあ？」 コペルくんは、学友たちの足元を見ていました。みんな、でっかい靴をはいていました。

「だって、その人、永久に、敵にはならないって、ことだもんね。これって、すごいよねえ！！」

「そんな、友達がほしいなあ！！　本当の友達に会いたいなあ！！」

U星のコペルくんの学友たちは、まるで、夢でもみるように言うと、腹いせのように、周囲の学友のあしもとに、派手に、つばを吐き散らしました。

「『そんな友達がほしいなあ！！本当の友達に会いたいなあ！！』 だって」

U星のコペルくんが口真似をして、首をすくめました。

「ぼくたち、そのお友達に、もう、会っているもんね！！」

二人は、ノッポの学友たちの谷間で、ハイタッチをしました。

「そんな友達がほしいなら、簡単じゃないか。自分を見ていたら、いいんだ！！」

「それが、違うんだよ！！　それもわからないか？　ここじゃなく、ぼくは、地球上にいるんだから！！」

「この二人を、見て見ろ！！　それが、現実なんだよ！！」

「でも、いくら、双子星でも、U星と地球では、環境が、大きく違っている筈なのに？　ぼくには、信じられそうもない！！　双子だって、似ているとは、限らないもの？」

学友たちの混乱は、二人のコペルくんの頭上で、続いていました。

「なら、地球のぼくたちも、ここ、U星に連れておいで！！　そうしたら、信じてやってもいいぞ！！　なあ、みんな！！」

「第一、誰なんだ？　この、コペルくんを、地球から連れて来たのは？　ええっ？」

「グリーンボーです！！」コペルくんが、消いりそうな

声を出しました。

「何？　グリーンボーって？　きみ、グリーンボーと一緒に地球から、やって、来たの？」

「きみたち、聞いたか？‥‥‥‥」

学友が勢い込んで、振向いた途端、二人のコペルくんの靴に、引っかかって、しまいました。

「あ、あ、あ、ああ！！」何人もの学友を突き飛ばし、勢いあまって転倒しました。

あとは、もう、殴あいです。

二人は手をつなぐと、混乱の中心から、逃げだしました！！　巨人国から逃亡する妖精みたいに！！

「ぼくたち、本当のお友達だもんね！！」

U星のコペルくんの肩に、コペルくんの腕が、コペルくんの肩に、U星のコペルくんの腕が、組合ました。

二人は、顔を見合せ、Vサインをすると、満足そうに笑いました。

笑い声は、太陽の沈んだU星の、紺青の空を、何時までも、ころころと、転がっていました。

U星の、子供の国では、子供たちが、床に寝転がって、ママたちから、たのまれた「万能メガネさん」について話あっていました。

「ぼくは、ぼく、あなたは、あなたの、ひらめきを！！」
「わたしは、わたし、きみは、きみの、ひらめきを！！」

の合言葉を、はさみながら、話つづけました。

これが、U星、こどもの国の、勤務のようすでした。

「万能って、どういうこと？」

「いろんなことができるってこと？『万能めがねさん』なら、カメラや、テレビや、ラジオや、電話なんかの働きも、できるって、ことじゃないかな？」

「まさか、いくら欲張りでも、チョコレートや、お金にも、なんて、ママたちも考えては、いないさ！」

「視力を矯正する。めがねを通して、正しい視力に訂正する、その働きが、万能と考たいな！　近視も、

遠視(えんし)も、乱視(らんし)も、老眼(ろうがん)も、一(ひと)つのめがねで、OKと！」

「そうなら、めがねをかけると、かけた人(ひと)の視力(しりょく)に合(あ)わせて、ぴたりと、めがねの方(ほう)が、レンズの方(ほう)が、変化(へんか)する。 視力(しりょく)の変化(へんか)に対(たい)して、万能(ばんのう)であること！ そう、考(かんが)えることにしようよ？」

「でも、その、万能(ばんのう)レンズは、どうしてつくるの？」

「これって、大変(たいへん)だよ。 ママたちにできるかなあ？」

「わからないよ？ でも、目標(もくひょう)はきまった！ あとは自由(じゆう)に話(はな)して！ そのまま伝(つた)えるから。それが、大人(おとな)の依頼(いらい)に対(たい)する、ぼくたちの答(こたえ)だ！」

グリーンボーが、結論(けつろん)を出(だ)しました。でも、なんだか、

気乗りしていないように聞こえました。

さあ、どうしたら？　椅子くんと、コペルくんが、顔を見合せました。

「まず、屈折の正常を、記憶させたら、いい！！」

「それから、屈折の現状をぴたりと、知って、正常に変化させる！！　人工智能を埋込むか？」

「ついでに、人間の水晶体を、正常にもどすことも出来たら、いいわね！！　あれれ、そしたら、メガネはいらなくなるか？」

「治療できる、めがねなら、それこそ万能？」

「それなら、めがねじゃなくって、手術するとか、薬で治療する方が手っ取りばやいんじゃないの？」

「いや、視力異常は、物理的なものさ！！水晶体の厚さと網膜までの距離と考える方がいい！！」

「眼鏡のつるを、耳につっこんだら、音楽がきけるわね！！」

「補聴器や、『通訳くん』の、やくめも出来ると助かるな、でも、あんまり、よくばらないほうが、いいかな？」

「クスクス草の樹脂は、光をよく透して、くちゃくちゃになるよ！！　つかえるかな？」

「眼鏡をかけると、かけた人がきれいに、可愛く見るといいね。かけると、楽しい！！　その色は？　形は？」

「その時の、気分によって、変化したらいいわね！！」

「でもさ、ぼくたちの、目的のめがねが、できたとしても、それって、商売になるかなあ？　めがね業界、真青だ

ぜ！！」

「業界(ぎょうかい)はどうでも、みんなにとっては、すごいことさ！！

この国(くに)に、どのくらいの、視力異常者(しりょくいじょうしゃ)がいると、思(おもう)う？」

「でも、そんな夢(ゆめ)より、ぼくたちの夢(ゆめ)「空飛(そらと)ぶ翼(つばさ)くん」を、

早(はや)く完成(かんせい)させたいな！！」

子供(こども)たちは、グリーンボーの見(み)ていない時(とき)をねらって、

カーテンで隠(かく)してある、「翼(つばさ)くん」をのぞきこみました。

なんでも聞きたがりやの、コペルくんが、勢(いきお)いよく手をあげました。

グリーンボーは、黙(だま)って、首(くび)を横(よこ)にふりました。

こんなことは、今(いま)までなかったことです。

「それより、あれを、見て！！」グリーンボーが、気分(きぶん)を

変えるように、窓を大きく開けはなちました。

　森に続く、泥んこ道で、子供たちが、グループをつくって試験管や、シャーレや、補虫網や、採取箱を持って、思い思いに、うずくまっていました。

「おーおい！！　到着したー？」グリーンボーが、大声をあげました。

「あと、一歩！！」子供たちの元気な声が返って来ました。

　グリーンボーが笑いながら手を振っています。みんな、立上がりました。

「結果、出ましたかあ！！」元気のよい、子供たちの声が、期待にふくらんでいます。

「あーあ、まだ、返事は、なーい！！　でも、もう、少しだ

け待とうよ！！　」

グリーンボーが、やさしく答ました。

気落した、子供たちの後ろ姿が、痛々しいほど、小さく見えます。

「みんなで、待っているんだよ。　手ごたえは、いくつか、あったんだが？　あとは運かあ？」

グリーンボーが、天をあおぎました。

「でも、もう少ーし、ぼくたちに、知識があれば、もっと短時間で、的中させることが、出来るのかも知れない？」

グリーンボーは、何だか、うちがわを見ているようでした。

「この中から、どんな新種が、どんな変種が、探だせるか？　それが、どんな力をもっているか？　勝負だ

よ！！『くすくす草(そう)』も、『コッペルU(ゆう)』も、『グリーンU(ゆう)』も、ぼくたちの、成功(せいこう)の殆(ほとんど)は、この、気(き)の遠(とお)くなるような、作業(さぎょう)のなかから生(うまれ)たんだ！！　ぼくも、この中(なか)へ立(た)ち戻(もど)らなければ！！　知識(ちしき)も、資金力(しきんりょく)も、組織力(そしきりょく)もない、ぼくたちが、成功(せいこう)できるとしたら、この道(みち)しかないような気(き)がするから！！」

　グリーンボーはいうと、自問自答(じもんじとう)でもするように、自慢(じまん)のバク転(てん)をしました。

　二日後(ふつかご)、子供(こども)の国(くに)から、地球(ちきゅう)に向(むか)って、小(ちい)さな気球(ききゅう)が発射(はっしゃ)されました。カプセルのなかには、新発見(しんはっけん)のクスクス草もよりの菌種(きんしゅ)が入(はい)っていました。

その日、ノッポの帽子の木に、帽子が二つ掛かっていました。

コペルくんと、椅子くんは、小鳥の声で目をさましました。

赤い小鳥がコペルくんの指先に止まろうとして、失敗し、コペルくんが驚いて抱きとめました。

青い小鳥は震ながら、椅子くんの胸に、丸くなって、かくれました。

「名前だって、書いてあるんだぜ！　おれの帽子返せよ！！」

帽子を追いかけてきた、いじめっ子が二人、ノッポの木の下で、長い棒を振り回して、どなっています。

「ひどいじゃ、ないかー！！　この泥棒！！　泥棒！！　おまえら、わかってるのかー。　逃る小鳥なんか、やき鳥

にして食(く)ってやるからなー！！」

帽子(ぼうし)の木(き)の、帽子(ぼうし)のなかでは、小鳥(ことり)の赤(あか)ちゃんが、

「チッチッチッ」と鳴(な)いていました。

いじめっ子(こ)たちは、帽子(ぼうし)の木(き)を、棒(ぼう)で、たたき始(はじ)めました。

めっちゃ、くっちゃ、のようでも、帽子(ぼうし)をねらって、たたいていることだけは、わかりました。

「まて！！」

椅子(いす)くんが、飛(とび)だしたコペルくんを押(お)さえ、両手(りょうて)を広げて、その前(まえ)に出(で)ました。

「お前(まえ)たち、知(し)っているか！！　帽子(ぼうし)は、小鳥(ことり)が、いじめられたら、帽子(ぼうし)の木(き)に逃(に)げてくるんだ！！　小鳥(ことり)を、いじめる子(こ)は、ぼくが、　決(けっ)して許(ゆる)さない！！」

椅子(いす)くんが、ニオウさまみたいに大(おお)きくなって、叫(さけ)びました。

こわくなって、小(ちい)さくなった、いじめっ子(こ)の一人(ひとり)から、コペルくんが、棒(ぼう)をうばいました。

「小鳥(ことり)をいじめる子(こ)は、僕(ぼく)が、この命(いのち)にかえても、決(けっ)して許(ゆる)さない！！」

椅子(いす)くんが、一歩前(いっぽまえ)に出(で)ました。

コペルくんも、一歩前(いっぽまえ)に出(で)ました。

二歩前(にほまえ)に出(で)ました。

三歩前(さんほまえ)に出(で)ました。

十歩前(じゅうほまえ)に出(で)ました。

椅子(いす)くんの勢(いきお)いに、け押(おさ)れた、いじめっ子(こ)が、棒(ぼう)をすてあわてて逃(にげ)だしました。

コペルくんと椅子くんが、追いかけました。

もう、一目散！！　いじめっ子たちは、一度も振り返りませんでした。

「いじめっ子に、はじめて、勝った！！」

コペルくんと、椅子くんが、顔を見合わせ、肩をすくめました。

二人は、赤い小鳥と、青い小鳥に、赤ちゃんのための、クスクス草をとってあげました。

おびえていた、赤い小鳥と青い小鳥が、クスクス草をくわえて飛び立ちました。 クスクス草は金色です。

クスクス草の葉脈をすかして、太陽が笑ったように見えました。

帽子の木に、クスクス草をくぐった、太陽の金色の光がうつって、小鳥の赤ちゃんが、特大の黄色い口を、開けました。

「ぼくが、間違っていました！！　いじめは一度だって、許しては、いけなかったんです！！　ぼくが、一度くらいは、ゆるしてやったらって、みんなの、約束をかえさせてしまって！！　ごめんなさい！！」

椅子くんが頭をかかえこみました。

「みんな！！　椅子くんの言葉を、聞いたか？　どうする？」

グリーンボーが、子供の国の仲間たちを見回しました。

「小鳥が幸福でないなら、失敗ね！！『幸福の帽子』

は、もともと、巣をかける場所のなくなった小鳥たちのために、始めたんだもの。　‥‥‥約束をもとに、もどそう！！　わたしが悪かったわ。椅子くんの言葉に乗ってしまって。　ごめんなさい！！」

　ももかちゃん　が、ほんとうに、すまなそうにいいました。

　それは、まるで、ももの花が、みんなの目の前で、しぼんだように見えました。

「このあいだ、ごめんなさいといったら、一度だけは、許すことに変更したけど、世界に、出荷前の、今なら、まだ、もとにもどせるぞ！！」

　パソコンに向かっていた、ケンケンが大声をあげました。

「それじゃ、変更だ！！　約束は、『幸福の帽子は絶対に、いじめを許さない！！』これで、いいかな？」

グリーンボーがいいました。

「OKです！！」みんなが、声を揃えました。

「ありがとう！！　ぼくたち、見ていましたよ！！　いじめっ子に立ち向かう、椅子くんと、コペルくんの勇姿を！！」

椅子くんと、コペルくんを囲んで、U星の子供たちが、おどり出しました。 もう、嬉しくって、たまらないというように！！

みんなにとっても、それは、大切な、大切な記念日になりました。

数日後、子供の国の子供たちの、覚悟をのせ、

『幸福の帽子』は、『コッペルU』の背中にのって、

世界に向って飛び立っていきました。

『幸福の帽子は、絶対に、いじめを許さない！！』に共感した子供や、大人が、世界中の町や村で、長い、長い列を作りました。

世界中で、小鳥と共に生ることの、楽しさに魅せられた人たちが、頭や、肩や、指先に、小鳥を止らせ、優しい目をして、公園や、広場や、路地に、嬉しそうに集まりました。

U星、ヤパン王国の人たちは、朝、『グリーンU』の蜜入り、ジュースを飲んで、ジョギングをするのが、日課にな

っていました。国民は、不老不死の願いを込めて、

若返ったように、元気になって行くようです。

病院は、いち早く、健康ジムに早がわりしました。

「この国の道路は、発電道なんだよ！！　これも、

忍者の末えい、この国の科学者の勝利だな！！」

グリーンボーは、言って嬉しそうにバク転しました。

「サルトビ、サスケも、腰を抜かしているだろうさ！！」

椅子くんが、鼻の下をごしごしこすりました。

「道路上でする運動は、車でも、人間でも、大きな

電源だよ。エネルギーは回収するんだ！！」

グリーンボーの手が、高々と上がりました。

『グリーンU』の、広い葉っぱには、なつかしい匂いがしました。

地球の匂いです。それは、椅子くんのお父さんの、コペルくんのママの、匂いでした。

二人は、グリーンボーに背をむけ、そっと、匂いを吸い込みました。

「初めて出会ったとき、きみたちは、森の、みどり色の数を、数えていたね！！　ぼくには、とうとう、巡り会えたと、わかったよ。嬉しかったなあ！！」

グリーンボーは『グリーンU』の大きな葉っぱの上に、ひっくり返って、どこまでも続く、青い、青い、空を見上げていました。

「こうして、きみたちと、一緒にくらしてきて、ぼくは、どう言っていいか、わからないほど、楽しかったよ！！　かけがえのない充実した時間が、過ていった！！『幸福の帽子』も、きみたちの勇気で、世界に、とどけることができた！！」

グリーンボーは、しばらく、目を閉じてから、思い切ったように言い出しました。

「でも、でも、きみたちは、そろそろ地球にもどらなければ！！」

コペルくんが泣出しました。

「また会えるさ！！　グリーンボーは、ぼくたちに、未来を見せてくれたんだよ。これは、地球に帰っても、ぼくたちの力だ！！」

椅子(いす)くんが、コペルくんを、なだめるように抱(だ)きしめました。

すぐそばでは、この国の人々(ひとびと)が、寝転(ねころ)んだり、駆(か)けっこをしたり、ご馳走(ちそう)を囲(かこ)んで、ピクニックを楽(たの)しんでいました。

「明日(あした)！！」

グリーンボーが、決心(けっしん)したようにいいました。

「地球(ちきゅう)に帰(かえ)る、小鳥(ことり)や昆虫(こんちゅう)と一緒(いっしょ)だから、心配(しんぱい)ないよ！！　かれらは、この道(みち)を、しっかりと記憶(きおく)しているんだから！！」と。

ぼくたち、U星(ゆうせい)、最後(さいご)の日(ひ)。

子供の国は、朝からゆれていました。

「こどもの国の、子供たちは、好きな時に、好きな所で好きなだけ勉強できる、研究できる、パスポートを、獲得したよ！！」

グリーンボーの声が、はずんでいました。

「翼を！！　翼を！！　とうとう、翼を手に入れたんだ！！」

子供たちが、空に向かって、両手を拡げて飛び上がりました。

「それには、生涯、奨学金がついているんだ！！　それに、ぼくたちのあげた、利益の半分は、子供の国の財産に加えられたよ！！　これは、みんなのものだ！！」

グリーンボーが、みんなを見回して、うなずいています。

好調にみえた子供の国の、子供たちも、翼を必要としていたのです。

それを、実感していたのは、子供たち自身だったのですから。

これは、グリーンボーの戦いの成果だったのでしょうか？　グリーンボーは、それについて、何一つ付け加えませんでした。

国も遅ばせながら、子供の国に対する褒賞を決定したようです。 それは、驚くほど、好意的なものでした。

おめでとう！！　子供の国の子供たち！！

彼らもまた、ひらめきと、努力だけでは、解決できない高度な知識と先端技術を必要としていたのでしょう

か？

時々(ときどき)みせた、グリーンボーの心配(しんぱい)も、これだったようです。

でも？　コペルくんが、手(て)を上(あ)げかけて、迷(まよ)っていました。

それが、わかったように、グリーンボーが、突然(とつぜん)、声を絞(しぼ)り出(だ)すように話始(はなしはじ)めました。

「でも、喜(よろこ)んでばかりは、いられないよ。これからの、ぼくたちに、一番大切(いちばんたいせつ)なのは、ぼくたち、自慢(じまん)の、「学校嫌(がっこうぎら)い」を、普通(ふつう)のなかに、埋(うも)れさせて、しまわないこと！！ぼくらは、どこまでも、ぼくらなんだから！！」

グリーンボーの言葉(ことば)が、子供(こども)の国(くに)の一人一人(ひとりひとり)の心(こころ)に、ノックもしないで、入(はい)り込(こ)んでいきました！！

椅子(いす)くんと、コペルくんの、心(こころ)にも！！

夕方(ゆうがた)になると、シュワシュワ、シュワシュワ、鈴(すず)をふるような、せみの声(こえ)が、ふくらんでいきました。

「先導(せんどう)するのは、ぼくたちのママだよ！！」

グリーンボーの胸(むね)から、ママが飛(と)びたちました。

それを追(お)って、せみたちが夕暮(ゆうぐ)れの空(そら)に、光(ひかり)の帯(おび)を広(ひろ)げながら、昇(のぼ)っていきます。

U星(ゆうせい)のコペルくんには、今朝(けさ)になって、二人(ふたり)の地球帰還(ちきゅうきかん)のニュースが、知(し)らされました。

「なら、ぼくも、地球に行きたい！！」

グリーンボーは、泣きじゃくる、U星のコペルくんをなだめるために時間をとられていました。

ようやくできた、親友を、おしんで、U星のコペルくんは年にふさわしい子供に返ったのでしょうか？

そのために、グリーンボーは、思い描いていた、感動的な別れの会も、別れのあいさつも、できませんでした。

椅子くんは、力づけるように、泣いているコペルくんを、引き寄せると、自分の帽子を伸ばして、すっぽり包み込みました。

「そうだ！　後はステップを！！」

グリーンボーの声がしました。

「ありがとう！！　また、きっと！！」

二人は、ちぎれるほど手をふりました。

コペルくんと、椅子くんが、ステップをふむと、気球のなかに、空気が張りつめ、気がつくと、虹色のスカーフをなびかせて、光の帯の中を昇っていました。

子供の国の子供たちが、白い翼で、小鳥のように、はばたくと、いっせいに飛び立ちました！！

『空飛ぶ翼くん』も、成功したようです。

それは、子供の国の子供たちの喜びを乗せて、自由に、高く、低く、東に、西に、丸くなったり、竿になったり、十字になったり、回転したり。　U星の空に、美しい

「宇宙(うちゅう)ショー」をくり広(ひろ)げていました。

やがて、手(て)を振(ふ)っているグリーンボーも、U星(ゆうせい)のコペルくんも、飛(と)んでいる子供(こども)の国(くに)の子供(こども)たちも、小(ちい)さく、小(ちい)さくなって行(い)きました。

ももかちゃんの、手(て)を離(はな)れた、白(しろ)いハンカチが、生(いき)ものように、いつまでも、ついて来(き)ました！！

「リリンボー、リリンボー、リリンボー、リリリ、リリリリ、シュワボー、シュワボー」

前(まえ)をいくママが歌(うた)いました。 呼応(こおう)するように、金色(きんいろ)のせみたちが歌(うた)いました。

「リリンボー、リリンボー、リリンボー、リリリ、リリリリ、シュワボー、シュワボー」

ふるさとに帰(かえ)る、地球(ちきゅう)の小鳥(ことり)が、昆虫(こんちゅう)が歌(うた)っていまし

た、透き通って、ひびきあって、楽しそうに！！

感動したコペルくんが、椅子くんを見上げました。

椅子くんは、あわてて涙のあふれた目を、ごしごし、こすりました。

気球のあとを、地球の森の、顔見知りの、蝶や小鳥たちがつづきました。

「フッフーン」 コペルくんの溜息を乗せて、金色のせみたちに導かれた、光の帯が、弧を描いて、宇宙空間を伸ていきます。

光の帯を、時々、天体の黒い影がすぎていきました。

星が衝突して、あげる火花が、地球に帰るものたち

の凱歌(がいか)のようにも、祝砲(しゅくほう)のようにも見(み)えます。

「ヒューヒュー」という、宇宙(うちゅう)の呼吸(こきゅう)する音(おと)が聞(き)こえてきました。これは、グリーンボーが教(おし)えてくれたものです。

　これから、芽吹(めぶく)ものを抱(いだ)いて、時(とき)を待(ま)っているような、そんな音(おと)に聞(き)こえる！！　と。

「ぼく、この宇宙(うちゅう)の謎(なぞ)を！！心(こころ)の謎(なぞ)を！！といてみせるよ！！」
　コペルくんが、いいました。

　椅子(いす)くんは、コペルくんが、急(きゅう)に大(おお)きくなったような気(き)がしました。

「ぼくは、共生(きょうせい)できる、世界(せかい)を！！」

椅子(いす)くんは決心(けっしん)したように言(い)うと、宇宙(うちゅう)にじっと、目(め)をこらしました。

もう、そこには、青(あお)く美(うつく)しい地球(ちきゅう)が、見(み)えていました。

おわり